胡風と「文藝講話」

一九四五年重慶――一九四八年香港

近藤龍哉

はじめに

胡風は、「文藝講話」が發表された後もなお、「それによって自分の思想を檢査し改造するどころか、依然として積極的に自分の誤った觀點を宣傳し、革命文藝の新しい方向に對抗しようとした」（何其芳）とされる。[1] そして、胡風の文藝思想は、「文藝講話」と原理的に對立していたとする議論が一般的である。しかし、「文藝講話」と胡風の文藝思想を、なんの留保條件もつけずに、同一の地平で對立的に存在していたかのように見る見方に私は疑問をもつ。二者擇一的な理論的對立を前提として、どちらが正しいのかという判定を繰り返すことは、たとえ結論が裏返ったにしてもあまり意味のあることに思えない。私はこれまで、そうした見方から距離を置いて、別々の現實から別々に形成されたものがどのような經緯で對立物にされていったか、を檢證する作業を續けてきた。[2]

それを簡單に整理すると、①一九四二年五月二日の延安における文藝座談會の開催から、「文藝講話」の發表までに一年半近く時間がかかったということ、②テキストとして成立し、發表される過程で「文藝講話」の性格に大きな變更があったこと、すなわちそれは單なる文藝理論問題ではなく、「中國共産黨の思想建設と理論建設における最重要文獻」（「中央總學習委員會の通知」）として扱われ、その精神は、「單に文藝理論や文化觀を解決する材料であるばかりか、人生觀や方法論を解決する」材料として、普及することが義務付けられた（「黨の文藝政策執行に關する決定」）こと、③「文藝講話」が重慶へ傳えられたのは、延安で『解放日報』に發表されてからさらに遅れてであり、しかも初めは黨内に限られたこと、テキストの一部が『新華日報』に掲載されたのは一九四四年元旦、全文が印刷されたのは一九四五年になってからであること、その位置づけにも、環境の違いを反映して大きな質的な違いがあったこと、④同じころ、重慶でも整風運動があり、批判の對象になった共産黨知識人は、いずれも胡風の信頼する黨員たちであり、しかも彼らは主觀的には延安の整風運動に呼應するつもりであり、その點では胡風も同樣であったこと、⑤胡風が「文藝講話」に對して最初に意見を述べたのは、一九四四年の三月十八日であり、「文藝講話」を解放區という狀況下での問題としてとらえ、重慶との狀況の違いを踏まえない教條的導入に贊成しなかったが、それは胡風一人の認識ではなく、先の黨員たちも同樣であったこと、⑥その狀況を打開するため、「文藝講話」傳達を任務として、何其芳、

劉白羽が同年五月の後半に延安から派遣されて來たが、彼らの體驗告白による説得は功を奏さなかったこと、⑦延安では「文藝講話」とほぼ同時に發表された「黨の文藝政策執行についての決定」が、『新華日報』に全文掲載されたのは、さらに遅れた八月二十六日であったこと、⑧そのあと胡風は雜誌『希望』の創刊にこぎつけ、掲載された舒蕪の「主觀を論ず（論主觀）」を批判する形で胡風への批判が起こるが、それは内部的な論爭に止められたこと、整風を文化工作委員會（以下文委と略）と『新華日報』の範圍にかぎり、「黨外の文化人に擴大するのは、時期でない」と判斷した周恩來の政治的配慮が大きく働いたこと、などである。

抗日戰以後を視野に、對立の深まる國民黨との驅け引きは微妙であった。延安とは異なったこうした政治狀況下の重慶で、周恩來の判斷は當然といえよう。黨外知識人を、國民黨當局の文化統制に對する自由の鬪爭に立ち上がらせ、民主運動に參加させることを第一と考えたからである。すでに三十年代の國防文學論爭における周揚と胡風、馮雪峰の對立と、その尾を引くと見られる延安での周揚と丁玲らとの對立を熟知していた周恩來は、「そうでないと、抽象的に世界觀や人生觀を論爭し、ひいては必要のない歷史問題に對する論爭を起こすことになり、國民黨頑固派に對する論爭を弱めることになり、内部の紛糾を招くことになる」と、その危惧するところを率直に示していた。[3]

前稿での檢討はここまでで、その後についてはただ次のようにまとめた。

「公然の批判は抑えられたが、それは政治的な見地から『時期でない』と見たからであって、適切な時期がくれば開始される可能性を殘したものであった。やがて、中國は抗日戰爭に勝利し、國民黨との内戰にも勝利の兆しが見える。まもなくその『適切な時期』は來ようとしていた。一九四八年、突然、香港の黨員文藝工作者たちによる「論主觀」と『希望』批判が始まるのである。その批判者の中心に、胡風の最も信頼する喬冠華がいた。これらへの反論として、同年、『リアリズムの道を論ず（論現實主義的路）』が書かれたのである。「主觀・公式主義と客觀主義についての大まかな再批判（對於主觀・公式主義和客觀主義的、粗略的再批判）」と副題をつけられたこの著作は、抗日戰爭中の國統區での文藝問題を、歷史的總括と理論問題の二つの視點からかなり體系的に述べたものとなった。その理論問題のなかには、かつて喬冠華や陳家康らと深めようと計畫していたこと、すなわち、マルクス主義哲學のなかで、人間とは、作家―創作する人間とは、形象―創作對象の人間とはどのような存在か、感性や人格をどうとらえればよいのかという問題に對する、初步的檢討を含んでいる。胡風理論という言葉が有効だとすれば、その概要はここに形作られたといってもよい。[4]」

香港での突然の批判は、いったいなぜ始められたのか。この點について私は、はなはだ不十分に、ただ「適切な時期」としか書かなかった。また、それがなぜ胡風と近い關係にあった喬冠華、邵荃麟らによって行われたのかという點についても、胡風の「喬冠華は胡風の名前で手を洗ったのだ――もともと重慶に居た時、彼はブルジョア唯心主義の重要な批判對象となったのだが、今飛び出してきて、胡風が主觀唯心主義であることを發見すると、彼自身は當然マルクス主義唯物論主義者に變わった」という言葉を引用したのみであった。また、誰によって始められたのか、という點については何も觸れぬまま筆を擱いた。

本稿では、こうした點を中心に、香港での胡風批判の中身とそこにいたる經過を檢討し、胡風が「文藝講話」の敵對物とされる過程を明らかにしたい。

一

胡風に對して正面からの公然とした批判が初めて行われたのは香港である。[5]その批判の舞臺となったのは『大衆文藝叢刊』で、その第一輯「文藝の新方向」は、一九四八年三月一日に刊行された。中心となったのは、文委の責任者（當時おそらく書記）であった邵荃麟である。[6]出版は、香港生活書店が引き受けた。創刊の辭にあたる文章「當面の文藝運動に對する意見――檢討・批判および今後の方向」は「本刊同人・邵荃麟執筆」と明記されていた。その冒頭近くに次のような一節がある。

我們以爲今天文藝思想上的混亂狀態，主要卽是由于個人主義意識和思想代替了群眾的意識和集體主義的思想。／個人主義的思想在文藝上表現爲多種的傾向，而互相拒斥着，實際上卻是同樣出發于小資產階級思想的根源。・・・正因此，群眾對于文藝的要求就不能明確地提到我們的日程上，大眾化工作也被有些人所輕視着，甚而被嘲笑和拒絶了。個人主義的文藝思想，一方面，表現在對所謂內在生命力與人格力量的追求。在這樣要求下，文藝的政治傾向與直接效果，被人們視爲〝庸俗說教〟而予以拒絶了；人們在追求着藝術的〝永恆價値〟，在歌頌〝原始的生命力〟與個人英雄主義，在高揚着超階級的人性論與人格論，把克利斯朵夫式的追求，肯定爲現代人生戰鬥的途徑。總之，階級鬥爭的精神在這裏被個人反抗的精神所代替了。（我々は、今日の文藝思想上の混亂狀態は、おもに個人主義の意識と思想が、大衆の意識と集團主義の思想に取って代わっていることによると考える。／個人主義思想は文藝においては樣々な傾向となって現れるが、しかも互いに排斥しあうが、實際は同じようにプチブル階級思想という根源から發しているのである。……まさにこの故に、大衆の文藝に對する要求は、明確に我々の日程に上ることができず、大衆化の仕事も、一部の人々から輕視され、嘲笑され拒絶されさえするのである。個人主義の文藝思想は、一方では、いわゆる內在する生命力と人格の力に對する追求となって現れる。この要求のもとでは、文藝の政治傾向と直接効果は、人々から「通俗的說教」とみなされて拒絶される。人々は藝術の「永遠の價値」を追い求め、「原始の生命力」と個人英雄主義を褒め稱え、超階級的人間性論と人格論を宣揚し、ジャン・クリストフ式の追求を現代の人生の戰いの道として肯定するのである。結局のところ、階級鬪爭の精神が、ここでは個人の反抗的精神に取って代わられてしまっているのである。[7]）

これらは、名指しこそしていないものの、明らかに胡風とその影響下にある若い作家・詩人を個人主義思想として批判し、それはプチブル階級思想の根源から來るもので、階級鬪爭の精神に取って代わるとし、その影響の廣がりを憂慮して「混亂狀態」といい、その克服を訴えているのである。同じ輯に、胡繩が、「路翎の短編小說を評す」を書いてプチブル知識分子の心理を批判しているのを見れば、そのことはいっそう明らかである。[8]

邵荃麟は誰もが認める人格者であった。權威主義やセクト主義とは無緣で、胡風とは一九四二年の桂林時代からの知己であり、胡風の『七月』に短編小說を譯してもいる。路翎が最初の中篇『飢えたる郭素娥（饑餓的郭素娥）』（一九四三年三月、桂林、希望社）を出版し好

評を博したとき、この小説に描かれた勞働者はちっとも勞働者らしくなく、勞働者の上着を纏っているに過ぎないと酷評するものもいたが、當時桂林の黨の文化工作小組の責任者だった邵荃麟は、桂林で自ら編集する『青年文藝』第六期に、非常に好意的な書評を書いている。

假如我們承認，所謂藝術上的現實主義并不僅僅是對于客觀現象的描寫和分析，或者單純地用科學的方法去剖解和指示社會的現實發展，而必須從社會人（作爲社會關係的總和的人）底內心的矛盾和靈魂的搏鬥過程中間，去掘發和展露社會的矛盾和具體關係，而從這種具體的社會環境裏來確證這眞實人物的存在，并且因爲這樣，這些人物的一切必須融合在作家的自身底感覺和思想情感裏，纔能賦予它們以眞實的生命，那末我以爲路翎的這本『饑餓的郭素娥』，可以說是達到了這樣的境界，可以說在中國的新現實主義文學中已經放射出一道鮮明的光彩。（いわゆる藝術上のリアリズムとは、單に客觀的現象を描寫、分析したり、あるいは單純に科學的方法を用いて社會の現實の發展を分析し指し示すものではなく、社會的人間（社會關係の總和としての人間）の內心の矛盾と魂の格鬪の過程の中から、社會の矛盾と具體的な關係を堀り出してきてひろげて見せ、この具體的な社會環境からその眞實の人物の存在を確實に證明しなければならない。そしてそれ故に、これらの人物のすべては作家自身の感覺と思想感情のうちに融合していなければそれらに眞實の生命を付與することができない。以上のことを認めるのであれば、私は、路翎のこの『飢えたる郭素娥』は、その境地に到達しているといえるし、中國の新現實主義文學にすでに一筋の鮮やかな光を放っているということができると思う。[9]）

この邵荃麟の言葉は、まさに胡風理論といわれるものそのものである。そして、「私の知っているのは、二十代の、中學も滿足に卒業していない青年だが、この小説には、なんと强烈な生命力が滿ち溢れていることか」「人類の魂の呼び聲、その呼び聲は低く弱々しいものだが、何世紀もの古い傳統の苦難の下の中國人の痛みと苦悶と原始の反抗を叫んだのであり、しかも新たな覺醒の最初の過程を暗示したのだ」と稱える邵荃麟は、路翎にとっては、最もよき理解者であったし、胡風にとっても、ともにリアリズムを探求する心强い同行者であった。

それが、わずか三、四年の後に、突然、斷罪的評價を下したのである。胡風は「私の本意を誤解し、曲解さえしたところが多い」と感じ、さらに胡繩の路翎の小説批判はいっそう受け入れがたく感じられたのである。[10] そして續く第二輯（五月一日出版）には、胡風が重慶時代最も信頼を寄せた喬木（喬冠華）が「文藝創作と主觀」でかつての自分の見解を含めて批判し、さらには第四輯（九月出版）には胡繩の「魯迅思想發展の道」と、力夫（邵荃麟）の「ロマン・ロランの『格鬪』――個人主義から集團主義へ」、第五輯（十二月出版）には邵荃麟の「主觀問題を論ず」と續き、この叢刊はさながら胡風たちを批判するために企てられたという穿った見方が生まれても仕方がないほどである。そして胡風もそのように受け取ったのだが、はたしてそれでよいのか、その間に何があったのかを明らかにすることが本稿の狙いである。

二

一九四五年一月、胡風悲願の雜誌『希望』が創刊され、大きな反響を呼んだ。胡風は、創刊の宣言にあたる、「身を民主のための鬪爭のなかに置いて（置身在爲民主鬥爭裏面）」で、「文藝創造とは、生きた

現實の人生との格闘から始まるものだ」とし、「作家にとっては、思想的立場というのは論理的概念の上に止まっていてはならず、化合して實踐的生活意志にまでなっていなければならない」ものだとした。[11]「作家は深く人民に入り人民と結合しなければならないというのは抽象的概念ではなく、生き生きとした感性的存在である」「人民から學ぶという課題や思想改造の課題が作家から得られる答えは、善男善女式の懺悔などであるはずがなく、創作實踐の中の鞭の一撃が一條の血痕となるといった闘爭であるのだ」という言葉は、しかし「文藝講話」の傳達に來た人々や黨の指導に忠實な人々には、「文藝講話」の傳達の仕方に對する挑戦的な言葉として受け止められた。同時に掲載された舒蕪の「論主觀」は、主觀の定義から始めて、創作における主觀（主體性）の役割を理論的に明らかにしようとするものであったが、理論問題にとどまらず、文壇のうちにある傾向を教條主義・客觀主義とし、その批判を明確にしていたので、「客觀主義」と目されたことを知った茅盾からは強い反發が示された。こうして重慶の進歩的文藝界には、國統區での「文藝講話」の受け入れかた、胡風たちの教條主義・客觀主義批判のあり方をめぐって對立と論爭が顯在化しようとしていた。

一月十八日付けの周恩來の南方局宛電文「大後方文化人整風問題についての意見」が發せられたのはこの時であった。この電報は、重慶から延安に戻った何其芳の口頭報告を聞いて書いたものだという。何其芳は劉白羽とともに、「文藝講話」の傳達と重慶文藝界の狀況調査の命を受けて重慶で活動した。その數ヶ月の調査をまとめて中宣部に文書で報告書を提出し、併せて大後方の進歩的文化人の中でできるだけ速やかに整風を展開するよう提案したのだという。[12]ただし、その結果は周恩來の政策的判斷によって限定的なものとなり、一月二十五日に、文委の責任者馮乃超の主催で文工會が一度會議を開き、舒蕪の「論主觀」に批判が集中したほかには、[13]胡風らに對する眞っ向からの批判が雜誌に掲載されるということはなかった。

しかし、電報と先を爭うように重慶に戻った周恩來は、さっそく文委と「新華日報」内部で整風を開始する。夏衍は、周恩來が重慶に戻ったあと、曾家岩（周恩來の公館）に徐冰、喬冠華、陳家康、夏衍を呼び、文藝座談會講話の精神と文藝整風以後の解放區の文藝工作の動向を傳えたことを回想している。[14]夏衍は、このあとしばらく執筆を中斷したこと、一九四三年以來の自分の雜感や漫談といった短文をすべて讀み返したこと、『新華日報』の社説も、周恩來がすべて目を通し、細かい指示を與え、時には何度も書き直させたことなどを回想している。黨内での整風が、周恩來の指示で行われたことは間違いない。しかしそれは延安のそれとはまったく違ったものであったろう。

延安から戻るとき、周恩來は毛澤東から三通の親書を託された。郭沫若と柳亞子と茅盾に宛てた同じ日付（一九四四年十一月二十一日）の手紙である。[15]これらは内容も分量もそれぞれだが、以後、この三人は毛澤東が重慶の知識人の中に見出した信用の置ける人物として別格の位置で遇されることになる。柳亞子と毛澤東との間の舊詩を仲立ちとした付き合いはこの頃から始まるらしく、この時の毛澤東の詩「沁春園・春」の公開をめぐるいきさつと、揶揄的に「協商體」とも言われる一種の詩壇の成立については木山英雄氏の勞作によって知ることができる。[16]後の二人の場合、そもそも、その判斷の基準の一つに、「文藝講話」への態度表明があげられるかもしれない。

當時毛澤東の祕書であり、「文藝講話」のテキストの作成にかかわっ

た胡喬木は、毛澤東を回想する談話の中で次のように述べている。

「座談會講話が正式發表されてまもなく、毛主席が私におっしゃった。郭沫若と茅盾が意見を發表したが、郭は『すべて物事には經（本筋）もあれば、權（臨機應變）もある』といっているよと。この言葉は毛主席が直接私におっしゃったもので、『經もあれば、權もある』という言い方がたいへん氣に入られ、知己を得たように思われたのだ。郭沫若のいう意味は文藝自身に『經もあれば、權もある』ということだが、當然敷衍させて、講話自身にも普遍的な道理もあれば、臨機應變の措置もあるといえるのである。[17]」

郭沫若の言葉が毛澤東の知るところとなった經緯について、胡喬木の回想でも定かではないが、時期は「文藝講話」が『解放日報』に發表されてからまもなくだという。さすが郭沫若で、毛澤東を感心させるほど洞察力に富み、かつ毛澤東に對する敬意が傳わる內容であったのだ。毛澤東の手紙は、それに應えてあまりある「あなたの『甲申三百年祭』を、私は整風文獻として遇します」という有名な文句で知られる懇切なものである。[18]

この年、中國は重大な時を迎え、重慶では國共談判の前哨戰が始まった。國民黨との緊張がますます强まる中、二月二十二日、重慶の文化界は、檢閱の廢止や人權擁護など、國民黨の獨裁强化に反對して、『文化界からの時局についての進言（文化界對時局進言）』（郭沫若起草）を發表した。この宣言は國民黨を震撼させ、緊張が高まった。陽翰笙が日記に「發表以來、連日緊張がみなぎっている。多くの友人が警告を受け、大きな災いが今にも起ころうとしている。[19]」と記すほどである。そして三月三十日、國民黨は、國共合作のシンボルのような存在であった國民政府軍事委員會文化工作委員會（郭沫若主任、略稱文工會）を、命令によって解散するという暴擧に出たのである。共產黨は、郭沫若をサンフランシスコ會議の代表とするよう國民黨に要求して入れられず、ソ連のモスクワ科學院二百二十周年記念參加のために送り出す。文工會の解散は、その專門委員の一人であった胡風にとって、生活の基盤を奪われる重大事でもあった。

少しもとに戻るが、共產黨內での「文藝講話」の影響も着實に浸透していった。解散前の文工會は、今後の運動方針として「一、農村の調査研究を强める。二、文化狀況の調査研究――特に民間藝術活動の調査研究を强める。三、本會同人の政治教育と文化教育を强める。」を三大方針としたほどである。[20]こうしたなかで、共產黨の指導的な人々の現在の文藝運動に對する感覺にも變化が生まれている。たとえば、文工會で長く活動している陽翰笙は日記にこんな會話を記している。

「會に行き、馮乃超と今後の我々の文藝運動の方向の問題について話す。二人は、まず我々は創作方向の面で徹底した轉換をすべきだ、という同じ思いに達した。現在のあのように痛くも痒くもない創作は、實際精力の無駄遣いで、まったくだめだ。」（三月七日）[21]

以群の編集する新しい雜誌『文哨』の準備が始まる。『文哨』（月刊）は五月四日に創刊、「我々の方向」と題する座談會、郭沫若の「人民大衆に學べ」、夏衍の「筆の向かう先」、茅盾の「近年紹介された外國文學」を卷頭に竝べた。

この間の出來事で特に目を引くのが、茅盾に對する特別の待遇である。六月二十四日、重慶文藝界は茅盾の五十歲の誕生日と創作生活二十五周年を祝う盛大な會を催した。茅盾の言によれば、この企ては、徐冰（周恩來祕書、當時文委書記）と廖沫沙から申し入れがあり、その

際徐冰の口から周恩來の意見であることが知らされた。茅盾の一家はもともと誕生日を祝う習慣がなく、誕生日もはっきりしていなかったので辭退したが、これは個人的なことではなく、文藝界がこぞって集うことによる國民黨への一大示威で、目前の民主運動を推し進めることだ、と説得されたという。[22] この會では、青年作家を奬勵することを目的として、文協に茅盾文藝賞が制定されることも發表され、老舍、靳以、楊晦、馮雪峰、馮乃超、邵荃麟、以群を選定委員に選んだ。こうして茅盾は、國民黨に對抗する重慶の進歩的文藝界のシンボルとなったのである。

三

一九四五年の重慶における胡風と茅盾の對立は、後に怨念に近い對立の意識に發展していった。茅盾は、回想記のなかで、『論主觀』發表後、新聞雜誌上で討論されることはなく、文藝界が開いた討論會で意見を交換したことがあるにすぎない。しかし、私は誰かがこの觀點に批判を持とうものならすぐに一部の人々に反駁されることになるだろうと感じ取り、その上かなり濃厚なセクト主義の臭いを嗅ぐことができた。當時胡風は理論的權威であり、しかも彼の後ろには彼の觀點を支持しているもう一人の理論的權威の馮雪峰がいた。……やはりそんな時、何人もの友人が、胡風が『客觀主義』と罵っているのは、私と沙汀を指していると私に告げた…しかし彼らが背後で言いふらしているだけで、文字になっていない以上、私も捨てておくしかなかった」と、その不快感を今に留めた書き振りで振り返っている。[23]

胡風が茅盾の作品を高く評價していなかったことは否定できない。ことはリアリズムの理解の仕方の違いであったはずが、公然とした論爭が抑えられた分、内にこもった對立になった氣配が讀み取れる。

『胡風回憶錄』には、一月二十五日の馮乃超主催の會議では、茅盾と以群が先頭にたって「論主觀」を批判したこと、數日後に馮乃超が、哲學者侯外廬を文工會に招いて批判の話し合いをしたことに續けて、「問題は周副主席のところまで上げられた。彼は茅盾、以群、馮乃超、馮雪峰、それに徐冰、喬冠華、陳家康、胡繩などを呼んで討論會を開いた」とし、周恩來は、「論主觀」の問題から離れて、すぐに客觀主義の問題について質問し、「そういう狀況は確かにあるが、客觀主義というと誤解を招きやすいから、傍觀主義を用いたほうがいい」と述べたこと、茅盾が何か言ったが、周恩來が『子夜』を例に眞實でないところがあると問題にすると意氣消沈してしまい、論爭は一時的に解決し、狀況はいくらか緩和したことを紹介している。[24]

胡風と茅盾については、さらにもう一つ對立の種があった。それは、路翎による姚雪垠批判である。ベストセラーとなった姚雪垠の中編小說「春暖かく花開くとき（春暖花開的時候）」を、路翎は「冰菱」の筆名で『希望』に評論「エロ文學について（談色情文學）」を書いて批判、すると茅盾が『文哨』第一期に「讀書雜記」を發表して姚雪垠を擁護、路翎の批判の仕方をたしなめた。今度は馮雪峰が、『文藝雜誌』に反駁の文章を書いた。これは一つの事件として文學界に強い印象を殘した。茅盾は、姚雪垠の小說には弱點があったことは認めながら、批判が偏っていたとし、「私のこの評論は、ほかの人から見れば、反論を唱えたことになるが、私はちゃんと考えがあってやったのである」と回想している。[25]

當時、邵荃麟一家と同じ作家宿舍に住んでいた彭燕郊は、當時を次のように回想している。

「あるとき、胡風がやってくると、ちょうどそこへ喬冠華も來て、彼ら三人はこの問題を半日議論し、夕食をとってからもまた論爭を續けた。喬冠華と邵荃麟は胡風を說得できなかったらしかった。……あとで邵荃麟は私に、胡風はずいぶん離れてしまった、『希望』はやはり純文藝の雜誌でやったほうがいいのにと語ったが、胡風は誰の『勸告』も受け入れるはずがないということは彼にもわかっていた。胡風にはそんな頑固なところがあった。[26]」

この回想からも意見の分岐と對立の樣子が傳わって來るが、こうした對立を背景に、この年、內部の會議が何度か開かれた。いくつかの回想があるが、回想相互に記憶の齟齬があって、事實關係は十分明らかではない。茅盾は、「四五年末に、重慶文藝界は周恩來同志の指示のもとで、數回の座談會を開き、胡風の文藝思想と舒蕪の『論主觀』について比較的深刻な批判を行い、馮雪峰に對しても批判を行った。私も席上發言した。しかし、胡風はその中から少しも敎訓を得るということがなかった。馮雪峰は周恩來が呼んで話し合いをしたあとでは、いくらか態度を變え、胡風の『主觀戰鬪精神』に贊成することはなくなったが、徹底的というわけではなかった」と書いている。[27]

林默涵は、劉白羽の回想として（引用ではなく）「周恩來の主催で曾家岩の周公館で會議が開かれた。參加者に茅盾、胡風、徐冰、馮乃超、何其芳などがいた。一度は深夜まで及び、みんな歸宅できなくなり、しかたなく夜が明けるまで客間でおしゃべりをした。茅盾だけにはテーブルの上に寢床を作ってやった」ことを紹介している。[28]先に紹介した胡風の回想も、これらと重なるものかどうか、判斷が難しい。しかし、いずれの場合も周恩來の存在（劉白羽と胡風は、周公館で行ったという記憶）が共通している。

この點で興味深いのが、重慶での國共談判の後、延安に戻った周恩來が、黨中央に對する活動報告を行ったという資料である。艾克恩編の『延安文藝運動紀盛』には、十一月二十五日の出來事として周恩來のこの報告を擧げ、「周恩來は重慶滯在中に、談判の合間を利用して、重慶文藝座談會を開催した」として、その內容が記されている。[29]

周恩來が重慶から延安に到着したのは、十一月二十五日であり、その日の報告ということになる。まず前半から見て見よう。

「周恩來は、都合三回座談會を開催した。第一回目は重慶天官府の郭沫若の家で、周恩來が自ら出席して重要講話を行った。その內容は、第一に、まじめに毛澤東思想を學習し、自分の過去の文藝活動を檢査し、自分の今後の活動を改善すること、第二に、毛澤東の文藝基準を運用して、魯迅、郭沫若、茅盾と創造社、文學研究會の五四以後の新文學運動に果たした重要な役割を分析したことである。彼は述べた。魯迅の役割が一番だ。魯迅の思想の多くは、毛主席の思想と一致している。革命的文藝界で、魯迅思想の革命性、深さと影響が最大である。創造社もよい役割を果たした。封建の鎖と枷を打ち破ったのは、進步であったと。彼は郭老の五四運動〔時期〕の新詩に對して肯定し、それらの詩は革命的ロマンチシズムであり、青年たちへの影響が大きかったと述べた。それから彼は茅盾について述べた。まず文學研究會について、この文藝團體は人生のための藝術を主張したことを肯定し、それがよい役割、進步的役割を果たしたことを認めた。」

一回目の會議は、陽翰笙の日記に照らして、十月十九日のことと確定できる。この日は、午後に魯迅逝去九周年記念大會が白象街の西南實業大厦で開かれ、周恩來が講演をしている。

「會後、文藝界の友人たちで、郭老の家のパーティにまわる。食事

のあと、郭家で『文藝漫談會』を行う。話の内容は、大半が過去の文藝活動の總括であった。話し合いの雰圍氣についていえば、皆やはりとても率直に話した」と陽翰笙は書いている。[30]

郭沫若に關する資料の中にも、十一月のこととしているが、「周恩來が重慶天官府郭沫若の寓所で文藝座談會を開き、席上講話を發表して、郭沫若の五四運動時期の新詩は革命的ロマンチシズムであり、青年に對する影響は大きかったと述べた」とあるのは、内容からみてこのときのことだろう。[31]

「二回目と三回目の座談會は、曾家岩五十號の客間で開かれた。周恩來同志は、當時文藝座談會の活動を取り仕切る指導的同志に委託して、彼のために主催させた。この二回の會議において、參會者は毛澤東文藝思想を武器にして、舒蕪の論文『論主觀』など主觀唯心主義を宣傳するもの、路翎の小説『青春の祝福』など勞働人民を歪曲し戯畫化するもの、自然發生論を煽るものを批判した。會議では、當時何人かの進歩作家（當時の文藝界の指導的同志たちを含む）の作品中に表れた暗い精神狀態を批判した。重慶文藝座談會のあと、周恩來同志の措置のもと、國統區文藝界は、比較的廣汎に毛澤東文藝思想を基準とした自己檢討が廣がり、國統區の文藝界の樣相は根本から變わった。」

後半部分が、先にあげた人々の回想とかかわっていることは確かであろう。正確な日時について、確認する手立てはいまのところない。舒蕪、路翎についてすでにこれだけ決定的な斷定が下されていたことは意外である。それに引き換え、胡風の名前が伏せられているのは、意圖するところがあってのことと、考えられる。

この報告から、私はさし當たって三つのことを指摘しておきたい。その第一は、この報告のありようからみて、文藝政策上、國統區という地域的な相對的獨立性が失われたということである。組織原則上はともかく、國統區の文藝政策は、文化人工作との關係で南方局に委ねられて來た。ありていにいえば、周恩來のところで最終決着ができた。それが、細部まで共産黨中央が關與する體制になった。國統區の知識人政策から共産黨指導下の思想問題へと扱いが變わったのである。第二は、共産黨による文學史評價の開始である。毛澤東の「新民主主義論」による魯迅評價が先例としてある。共産黨の第七次代表大會（七大）は、毛澤東を中心とした體制を確固とした大會であるが、六期七中全會（一九四四年五月―一九四五年四月）は共産黨の歴史問題に決着をつけ「歴史決議」を採擇するため十一ヶ月を要した。この間重要な役割を果たした周恩來であったが、今回の報告は、文學においても對立の根にある歴史問題に決着をつけようとしたのか、五四以來の文學史的評價にかかわっており、それとの關連のなかで抗戰時期の文學活動に對する總括も行われ、人材評價も行われたように見受けられる。以上二つは、周恩來によるというよりは、共産黨の體制にかかわって生じたことといえよう。あるいは實際、周恩來の評價というより、共産黨中央の評價を代辯するものであったかもしれない。そして第三は、こうした變化のなかにあってもなお、これまでの周恩來らしい配慮が、力として辛くも作用しているということである。それは、胡風を名指しで指彈することが抑えられたということにあらわれている。

この年八月二十八日には、毛澤東が國共談判のために重慶を訪れ、雙十協定の成立まで約四十日間滯在した。この間、毛澤東は多くの要人知識人と會見している。あらかじめ親書を託した三人はもちろんその中に入っていたが、胡風はついに親しく話をする機會を失した。毛

澤東に隨行した胡喬木は、舒蕪と會談し、胡風も同席している。舒蕪は顔を眞っ赤にして胡喬木と論爭し、會談はきまずく物別れのまま終わった。こうした印象をもってかえった「黨中央」の前に、周恩來は、重慶での文藝座談會の報告を出さなければならなかったのである。

四

翌一九四六年、馮雪峰は雜誌に「民主革命の文藝運動を論ず―過去と現在の反省および今後の活動―」を發表し、その中でかなり全面的に自身の見解を明らかにした。[32]それは五四以來の歷史評價についても大きなスペースを割き、左連の活動にかかわる各種の理論問題に檢討を加えた興味深い內容をもっている。ここでは、それらについて觸れることは置いて、胡風の理論に關わる部分に目をとめると、馮雪峰は次のように述べている。

現在可再談一點的，是在反教條主義和客觀主義的聲中，還有着所謂主觀力或熱情的要求，以及所謂「向精神的突擊」或「自然力的追求」等問題。／有人將這些當作了危險的傾向來看。但我以爲我們先應該對問題從積極的時代的意義上去看，得出積極的要點和我們領導的方向。現在就正是革命發展，人民的力量和鬥爭高揚的時代，知識份子和青年和作家的某些熱情的表現和要求，就不能不是反映或嚮往革命和人民的這種高揚的東西，也不能不是寄寓着文化和個性的解放，未來的生活和藝術理想之追求的東西……這些情形，主要的應看作對于革命的接近和追求，而反映到文藝和文藝運動的要求上來是非常好的，也正爲我們文藝所希望的。（もう一つ述べておかなければならないのは、教條主義と客觀主義に反對する聲のなかに、いわゆる主觀力あるいは熱情の要求や、いわゆる「精神に向けての突擊」とか「自然力の追求」などがあるという問題である。これらを危險な傾向とみなす人がいる。しかし私は、我々が問題をまず積極的な時代的意義から見るべきであり、そこから積極的ポイントと我々の指導方向を手に入れるべきであると思う。現在はまさに革命が發展し、人民の力と鬪爭が發展している時代であり、知識分子と青年や作家のある種の熱情の表現と要求は、革命と人民のこのような高揚を反映するとか思慕するものにならないわけにはいかず、文化と個性の解放や未來の生活と藝術理想に對する追求が託されたものにならないではいられないのである。…こうした情況は、主には革命への接近と追求と見なすべきであり、それと文藝と文藝運動の要求に反映することは非常によいことであって、まさに我々の文藝が望んでいることでもある。[33]）

馮雪峰は、教條主義・客觀主義を批判する論に、不十分さや自然に含まれる不純な夾雜物（たとえば個人主義の殘滓やその他のプチブル階級的なもの）があることを指摘した上で、それらを革命の發展期における積極性として評價しようとしたのである。さらに、

主觀力的要求，也是如此。我們先不能以爲這是借了批判教條主義的機會，來試行注射唯心論毒素的企圖，因爲在今天沒有這樣的可能，同時它是分明地在對革命抱着精神上的追求之下提出問題。（主觀力の要求も同樣である。我々はまず、これを、教條主義を批判する機會を借りて唯心論の毒素を注入することを企んでいると考えてはならない。なぜなら、今日そんな可能性はないし、同時にそれは明らかに革命に對して精神的追求を抱いて問題を提出しているのであるから。[34]）と擁護している。

また自然力、原始の力といった新しい觀點にも「作者が進步的指導と組織の必要を否認しておらず、このような原始の力さえあれば本當

の解放に十分到達できると思っているのでない限りは、我々は自然力や原始の力の追求だといって作品の價値を否定してはならない」と述べるなど、四五年末の時點で共産黨内に支配的であった、胡風や舒蕪や路翎を、唯心論やプチブル思想とする批判に對して、限定的ながらその積極性を評價し擁護しているのである。[36]

論文冒頭の付記には、「いくつかの雜誌編集者が數人の友人を招いて、新文藝運動に對して、『過去と現在の檢討および今後の活動』という課題を提示し、三、四回『漫談會』を行った。私も招かれて參加し、一度かなり長い總括的發言をした。いま『中原』『希望』『文藝雜誌』『文哨』などの四雜誌が臨時の連合版を出すことになり、編者が私に發言の記錄に手を入れて文章にし發表しろといい、斷りきれないので、仕方なく整理して、私の個人的理解ということにする」と書かれている。[36]しかし、内容は明らかに、共産黨の内部における文藝指導という觀點からの發言であり、會議の性格もある程度想像がつく。

雜誌編集責任者は邵荃麟であり、邵荃麟はこの時すでに國統區の文藝運動を總括する仕事を任務としていた。邵荃麟はこのとき必ずしも馮雪峰と近い見方をしていたわけではなく、胡風とその影響下の青年たちの攻擊的な批判の仕方に對しては強い批判も持っていたが、民主鬪爭を戰うという統一戰線政策の立場から、『聯合特刊』を企て、對立の顯著な問題をめぐる討論の場を提供し、馮雪峰の文章をその呼び水にしようとしたのである。

編者は次のようにのべている。

經過八年的抗戰，我們的文藝戰鬥，無疑是收獲了許多輝煌的成果，然而也不能諱言曾經產生過若干偏向和存在着某些缺憾。爲了應付今後新的形勢，和準備展開更深廣的文藝運動，那末，在這歷史轉換的時候，便需要有一次對于過去文藝運動廣泛而切實的檢查，和對于今後文藝運動正確途徑的討論。（八年の抗戰を經て、我々の文藝の戰いは、疑いもなく多くの輝かしい成果を擧げたものの、過去に若干の偏向を生み出したことといくらかの不十分さが存在していることに對しても口をつぐむわけにはいかない。今後の新しい情勢に對應するためには、そしてより廣い文藝運動の展開を準備するためには、過去の文藝運動に對して廣汎で切實な檢討と、今後の文藝運動の正しい道筋についての討論が必要である。[37]）

重慶の有力な進步雜誌が連合する形をとったこと自體歷史的事件として記憶すべきことである。『中原』は、一九四三年三月創刊の大型の文化雜誌で、郭沫若主編、實際は共産黨中央南方局及び『新華日報』の知識人たち（喬冠華、胡繩、蔡儀、陳家康等）による學術性の強い雜誌である。『文藝雜誌』は、王魯彥が桂林で創刊、邵荃麟によって重慶で復刊され、文藝評論に力をいれた雜誌である。『文哨』は、前述したとおり、一番新しく、葉以群によって一九四五年五月に創刊された文藝誌である。

一九四六年の時點で、これら共産黨色の強い雜誌のグループに『希望』が加えられ、共同の雜誌を出していたという事實は、馮雪峰の文章が、當時の重慶の共産黨の指導グループのなかの許容範圍に入っていたことをも意味するのである。『聯合特刊』の編集には、『希望』を代表する形で路翎が加えられ、自身の作品も多く掲載されたことも付け加えておこう。

しかし、この企ては、十分な成果を上げぬまま、半年後の一九四六年六月をもって終焉することになる。終刊の辭ともいえる「讀者へ」は、次のように述べる。

「本來の計畫は十分に實現することができなかった。復員の準備に忙しかったからかもしれないし、安易に發表したくないからかもしれないが、多くの友人はその意見を書くことができなかった。それ以來、立ち去る人が多くなるにしたがって、この雜誌の理論的文章も次第に少なくなっていった。[38]」

終刊するに至った一番の原因は、情勢の變化により四つの雜誌の責任者がそれぞれ前後して重慶を離れたからである。一九四六年一月の政治協商會議が閉幕した後、國民黨の差し金でその祝賀會が襲われる事件が起こり（較場口事件）、政治狀況も非常に流動的になった。重慶を離れて上海に移る人が多く、文藝の中心地も上海に移った。胡風自身も、二月二十五日上海に戻っている。しかし、この雜誌の試みが成功しなかった背景には、文藝界の對立的雰圍氣があり、公開の民主的討論で解決するにはあまりにも根深くなっていたことも讀み取れよう。

五

さて、最初に引いた邵荃麟の文章にも、實は重慶での檢討のことがでてくる。「一九四五年の年末に、重慶で集團的檢討が行われたが、この右傾の危機が指摘されたものの、明確な結論は得られなかった。そのため、文藝運動の中心が上海に戻ると、持ち歸られた思想の主流も、あのように軟弱で空虛であった。[39]」

ここで言う「右傾の危機」とは、胡風らを指しているのではなく、これはもっと根本的に、抗日戰爭期の共產黨の文藝方針を批判した言葉である。もちろん、批判の對象は、「大後方」つまり國統區の文藝運動に限られる。

「この十年間の我々の文藝運動は、一種の右傾狀態にあった、と指摘しなければならない。この右傾狀態を作り出したのは、長期の抗日文藝統一戰線運動の中で、我々が二つの路線の鬪爭を堅持することをおろそかにし、『セクト主義』の傾向を克服するときに、知らず知らずに自分の階級的立場を弱めていたことによるのである。ひどい場合になると、この觀念が多くの人の頭の中でとっくにぼやけてしまってさえいた。[40]」

「一九四二年以降、延安で文藝思想の新しい發展が始まっていた時、大後方の文藝運動は、非常に暗い無力の狀態にとどまっていた。……この時期において、文藝運動の推進者と我々の理論・批評家は、このような危險な傾向に注意を拂わないばかりか、逆に自らがこの變天（世の中がもとに戻る）思想のとりことなり、あまつさえブルジョア唯心主義思想の影響さえ受けるしまつだった。我々も感性と人間性を强調し、倫理的觀點ないしは人道的觀點から社會を批判していた。これらの傾向は時を移さず正されねばならなかったのに、我々は延安文藝座談會が指し示している文藝の大衆路線と大衆觀點を、明確に具體的に强調することができなかった。この座談會の成果は、後方ではあるべき廣く熱烈な討論が得られず、むしろ無關心だったというべきであった。我々は、言論と出版の自由を戰いとる民主鬪爭をのぞいては、積極的に作家たちを喚起して自身の意識改造の問題に注意を向けさせなかった。[41]」

つまりは、國統區の文藝政策に責任を持つ指導部が、方針轉換の時期を失したことを含めた自己批判であり、「階級的立場」に立った新方針の提起なのである。そして、その契機は、目前に迫った決勝の時の確信であった。邵荃麟のこの論文は、驚くほど共產黨の路線が露出

している。

「光芒萬丈の歴史の道路が、我々の前に開いている。明確で輝かしい矢印が、その道を指し示している。それこそ十二月二十五日のあの歴史的文獻であり、それは中國の目前のすべての運動の指標である。數年來、間斷ない英雄的奮鬪によって得た勝利、人民が自分の力で打ち立てる國家、それが今では歴史の彼方のものではなく、目の前の現實なのだ。[42]」

「歴史的文獻」とは、共産黨の一九四七年十二月二十五日の決議「目前の形勢と我々の任務」である。これは、邵荃麟一人の考えというより、もっと上層の指示によると考えたほうが納得できる。しかし殘念なのは、せっかく抗戰期に生まれた知的冒險の芽が摘まれ、共産黨員をも卷き込んで進んだマルクス主義文學論深化の試みに、個人主義や唯心論の烙印が押されたことである。そして批判の矛先は、沈從文、朱光潛といった「自由主義」知識人に、より鋭く向けられていたことも指摘しておかなければならない。

終わりに

國共の最後の決戰を目前にして、多くの進歩的知識人は上海を逃れ香港に集まっていた。香港の共産黨の指導部は、新政治協商會議のメンバーを解放區へ送り込む任務を擔っていた。民主黨派に第三の道はないことを認めた民主人士を選別すること、共産黨に潛り込む危險な人物を排除すること、そして選んだ人々を安全に解放區に送り込むこと、それが彼らの任務であった。文藝理論の是非の論爭をしている暇はなく、すでに新しい國家建設に有用な知識人を選ぶ時であった。知識人の思想改造が問題になっていた。

重慶から上海に移っていた胡風は、八年餘離れていた當地での生活を立て直すべく奮鬪していた。『希望』の復刊を果たし、文協の理事にも再選されていた。郭沫若や茅盾は四七年中に香港に移り、上海に殘る知名人も少なくなっていく最中、香港で胡風批判を始めるという噂を聞く。半信半疑のうちに『大衆文藝叢刊』を受け取り、まずは衝撃を受け、その反批判として『論現實主義的路』を書いた。胡風にとっては、重慶時代に追求した理論の深化を目指したものだが、思わぬ集中的批判のせいで、その態度はよりいっそう論爭的となった。

香港の共産黨の指示を受け、胡風が妻子を殘し船で單身香港に向かったのは、一九四八年十二月九日のことである。香港に滯在した二十日あまり、元の南方局の責任者たち（邵荃麟、喬冠華や潘漢年ら）と話し合った。胡風には、これらの人々が、不意打ちのように自分たちだけに集中攻擊を加えた理由を理解できなかった。彼らの態度が、自己の信念をいとも簡單に取り消す不誠實なものに見えた。彼は、「善男善女式の懺悔」のような思想改造になることを危惧し、自己の內部から出たものでないうわべの態度變更こそ、もっともいまわしい「市儈主義」として批判してきたのである。彼らの、共産黨の指導部にいる者として政治的狀況の認識から行った選擇と、その過程における苦澁、だからこそなんとか胡風を窮地から救出しようという心情を理解できなかったのである。樓適夷は回想してつぎのように語っている。「香港工委で文藝工作を擔當していた邵荃麟同志が私を呼んで言った。全國がまもなく解放されようとしている。今後文藝界は黨の指導のもとに一致團結し、協力することが非常に重要になるけれども、胡風はまだわが道を行くで、みんなとうまくいかない。今度彼の文藝思想に對する論爭を卷き起こした目的は、彼を團結させ我々との共同鬪爭を

させることにある。君は胡風と親しい間柄だから、話し合ってくれなければいかん。…私は心を込め、心を高ぶらせて話したが、彼は私の眞剣な様子を見ながら、ただかすかに微笑むだけで、ほとんど返事をしなかった。どうやら私の話は急所をはずしていたらしく、當然説得はできず、使命は果たせなかったようだ。[43]」彭燕郊は、邵荃麟が「胡風はマルクス主義者として知られているが、我々は彼をマルクス主義者と認めていない。だが、彼の理論を黨の理論だと誤解している人々さえいるのではっきりさせる必要があるのだ」と述べたと回想している。そういう側面もあったことは否めまい。[44]

年があらたまった一九四九年一月六日、胡風は香港を離れ、海路、東北の解放區へ向かった。話し合いは不十分なまま、共産黨は胡風を解放區に送り込むことを決斷し、胡風は、問題は決着し共産黨は自分を信頼してくれたと自分に言い聞かせて、準備されていた船に乘り込んだのである。

注

(1) 何其芳「現實主義的路，還是反現實主義的路？」『胡風文藝思想批判論文匯集』二集　一九五五年　作家出版社

(2) 近藤龍哉「『文藝講話』の重慶傳播と胡風——大後方における民主の闘いと毛澤東思想の間」(The Transmission of the *Yenan Talks* to Chungking and Hu Feng: Caught between the struggle for Democracy in the Great Rear Area and Maoism) 東方學會「ACTA ASIATICA」No.72　1997　日本語原文　日本女子大學史學研究會『史艸』第三七號、中國語譯　吳俊編譯『東洋文論——日本現代中國文學論』浙江人民出版社

(3) 周恩來「關于大後方文化人整風問題的意見」『南方局黨史資料　六　文化工作』重慶出版社　一九九〇年

(4) 近藤龍哉「『文藝講話』の重慶傳播と胡風——大後方における民主の闘いと毛澤東思想の間」(前出) 引用は、日本語原文『史艸』による。

(5) これ以前にも胡風を批判した者がなかったわけではない。例えば成都にいた黄藥眠の二回の批判があることが、丸山昇氏『文化大革命に至る道』(二〇〇一年、岩波書店) で言及されている。ただ、一回目は胡風が執筆したとは言え、文協の年次大會の報告 (一九四四年) に對する批判である。二回目の「論主觀」に對する批判も、湖南 (不詳) と廣州 (『文藝生活』一九四六年三月) で發表された。
一九四八年に香港で胡風批判が始まると、黄藥眠の論文集『論約瑟夫的外套』が單行本で出版され、香港『文匯報』の副刊『文藝周刊』第四期に茅盾が讀後感を書くなど、その存在が再度浮かび上がることになる。

(6) 香港工作委員會 (工委) の指導のもとに文委が成立したのは、一九四七年初で、書記に夏衍が、委員に馮乃超、邵荃麟、胡繩、周而復がついた。三月、馮乃超が文委書記を引き繼いだ。四八年中に邵荃麟に引き繼がれた模様だが、時期は明らかでない。參考文獻：小琴「辛勤奮鬥的一生——追念父親邵荃麟」『名人與冤案　三』一九九八年　群眾出版；李偉江編『馮乃超研究資料』一九九二年　陝西人民出版社

(7) 「對于當前文藝運動的意見——檢討・批判和今後的方向」『大衆文藝叢刊』第一輯「文藝的新方向」六頁　一九四八年　香港生活書店

(8) 胡繩「評路翎的短篇小說」『大衆文藝叢刊』第一輯「文藝的新方向」(前出) 六頁

(9) 邵荃麟「『飢餓的郭素娥』」『邵荃麟評論選集』下册　四九六頁　人民文學出版社

(10) 胡風『胡風回憶錄』第四一一頁　一九九三年　人民文學出版社

(11) 胡風「置身在爲民主鬥爭裏面」『希望』第一集第一期　三頁—五頁　一九四五年一月　「文藝創造，是從對于血肉的現實人生的搏鬥開始的。」

「作家應該去深入或結合人民，并不是抽象的概念，而是活生生的感性的存在。」「從人民學習的課題或思想改造的課題從作家得到的回答就不會是善男善女式的懺悔，而是創造實踐裏面的一下鞭子一條血痕的鬥爭。」

(12) 艾克恩編纂『延安文藝運動紀盛』五六八頁　一九八七年　文化藝術出版社

(13) 林默涵「胡風事件的前前後後」『新文學史料』一九八九年第三期　五頁

(14) 夏衍『懶尋舊夢錄』五一九頁　一九八五年　生活・讀書・新知三聯書店

(15) 毛澤東『毛澤東書信選』二四一頁―二四五頁　一九八三年　人民出版社

武在平『巨人的情懷―毛澤東與中國作家』　一九九五年　中共中央黨校出版社

(16) 木山英雄「『沁春園・雪』――詩の毛澤東現象」『文學』二〇〇一年一、二月號「弧絕中の唱和――胡風、聶紺弩」『文學』二〇〇二年一、二月號

(17) 胡喬木「關于延安文藝座談會前後」『胡喬木回憶毛澤東』　六〇頁

一九九四年　人民出版社「座談會講話正式發表不久，毛主席跟我講，郭沫若和茅盾發表意見，郭說，〝凡是有經有權〟。這話是毛主席直接跟我講的，他對〝有經有權〟的說法很欣賞，覺得到了知音。郭沫若的意思是說文藝本身〝有經有權〟，當然可以引申一下，說講話本身也是有經常的道理和權宜之計的。」

(18) 毛澤東『毛澤東書信選集』(前出) 二四一頁

(19) 陽翰笙『陽翰笙日記選』三五三頁　一九八五年　四川文藝出版社

(20) 同右　(三月三日) 三五五頁

(21) 同右　(三月八日) 三五七頁

(22) 茅盾「走在民主運動的行列中」『新文學史料』　一九八六年第二期　二八頁

(23) 同右　二六頁

(24) 胡風『胡風回憶錄』(前出) 三三六頁

「客觀主義」に關する周恩來の言葉については、これとほぼ重なる回想が胡風の「文稿三篇　關于喬冠華（喬木）」(『新文學史料』一九九五年第二期　一九〇頁) にある。

(25) 茅盾「走在民主運動的行列中」(前出) 二六頁

(26) 彭燕郊「荃麟―共產主義聖徒」『名人與冤案　三』三七二頁　一九九八年　群眾出版社

(27) 茅盾「走在民主運動的行列中」(前出) 二六頁

(28) 林默涵「胡風事件的前前後後」(前出) 七頁

(29) 艾克恩編纂『延安文藝運動紀盛』(前出) 六三二頁

(30) 陽翰笙『陽翰笙日記選』(前出) 四三四頁

(31) 『郭沫若研究資料(上)』七七頁　一九八六年　中國社會科學出版社

(32) 「論民主革命的文藝運動―過去與現在的檢查及今後的工作―」『中原　文藝雜誌　希望　文哨　聯合特刊』一九四六年一月の第一期から三期に分けて連載。後に、作家書局より單行本で出版　一九四六年六月

(33) 「論民主革命的文藝運動―過去與現在的檢查及今後的工作―　二、什麼是主要的錯誤？」『中原　文藝雜誌　希望　文哨　聯合特刊』第二期　一五頁、引用は原載誌によったが、第四期の本人による誤植訂正記事を參照した。

(34) 同右　一五頁―一六頁

(35) 同右　一六頁

「祇要作者不否認進步的領導和組織的必要，不以爲祇有這種原始的力量就能夠走到眞實的解放，我們就不能指爲自然力或原始力的追求而否定了作品的價値。」

(36) 『中原　文藝雜誌　希望　文哨　聯合特刊』第一期　五頁　單行本に

も、ほぼ同様の付記があり、末尾に一九四五年十一月の日付が付けられている。

(37)「關于聯合特刊的出版」『中原　文藝雜誌　希望　文哨　聯合特刊』第一期　三二頁

(38)「致讀者」『中原　文藝雜誌　希望　文哨　聯合特刊』第六期　第一頁

(39)邵荃麟「對于當前文藝運動的意見」(前出)八頁

(40)同右　五頁

(41)同右　八頁

(42)同右　一二頁

(43)樓適夷「記胡風」『我與胡風』八頁　一九九三年　寧夏人民出版社

(44)彭兼郊「荃麟―共産主義聖徒」(前出)三七四頁